
受け継がれる運命

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

受け継がれる運命

【Nコード】

N3698D

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

アルテミスが姉とも慕うもう一人の月の女神セレネー。彼女は美貌の若者エンディミオンを愛するのだが。ギリシア神話において月の女神の恋は報われないのでしょうか。

第一章

受け継がれる運命

月の女神は二人いた。よく知られているのはアルテミスだが彼女とは別にもう一人女神がいた。

その女神の名をセレネーという。アルテミスが金髪に緑の目の少女的な美しさの持ち主であるのに対して彼女は同じ金色の髪と緑の目を持ちながらも大人の女性の姿をしていて穏やかな顔の女性であった。身体もまた女性的でありその心はさらに優しい女のものであった。そうした女神であった。

彼女は言うならばアルテミスの姉であった。血はつながっていないが二人の仲は姉妹そのものであった。いつも二人で夜の空を駆り月を導いていた。

「ねえアルテミス」

ある夜のことだった。セレネーはアルテミスに顔を向けて声をかけてきた。

「貴女は結婚はしないのかしら」

「結婚ですか」

「そうよ。貴女も女性なのだし」

セレネーはその少し垂れ気味の目を彼女に向けていた。その目は二重で実に澄んでいる。やはり同じ碧でも少し釣り目で二重でもその光が強いアルテミスとは違っていた。

「何時かはきつと」

「まだ。それは考えられません」

アルテミスは戸惑った顔でそうセレネーに答えるのだった。

「私は月の女神になって間もないですし」

「まだお仕事の方が大事かしら」

「はい」

正直にセレネーに答えるのだった。

「そう考えています」

「けれど貴女のお兄さんは」

「兄は兄です」

何故かアルテミスは兄の名が出ると顔を不機嫌にさせた。彼女の双子の兄である。アポロンのことだ。

「兄のあれは悪い癖です」

「そうなの」

「そうです。私もいつも言っているのですが」

アポロンは女好きでありしかも美少年も好きだった。そうした見境のないところが妹は許せなかったのだ。それでいつも注意しているが聞かないのである。

「どうしても。なおらなくて」

「困っているのね」

「そうです。どうしたものでしょうか」

「いいことね」

だがセレネーは。アルテミスのその話を聞いて穏やかな笑みを浮かべるだけであった。

「それは」

「冗談ではありません」

だがアルテミスは生真面目な顔でこう言葉を返した。

「子供も何人もいて。本当に」

「皆そうなのよ」

セレネーは怒る彼女にまた穏やかな顔を向けて述べるのだった。

「神様も人間も」

「それが好きになれません」

アルテミスは口を尖らせていた。

「ふしだらです」

「愛を楽しむのはいいことなのよ」

セレネーはまたアルテミスに述べた。

「誰であってもね」

「愛ですか」

「私もね。そうしたいのよ」

意外にも彼女自身はまだその経験がないようである。それが言葉にも出た。

「けれど機会がなくて」

「そうなのですか」

「ええ。それで貴女にこんなことを言うのもあれだけれど」
「いえ」

しかしアルテミスはセレネーのその言葉には素直に首を横に振ったのだった。

「それは違います。先程お姉様が仰ったではありませんか」

「愛を楽しむことはいいことね」

「そうです。ですから」

アルテミスはそう述べる。

「これから愛を楽しまれては如何でしょうか」

「そうね。相手がいれば」

アルテミスの言葉を受けて考える顔になった。思案に入るその顔も実に美しい。二人が並んで座っている天空を駆ける馬車の後ろにある月の穏やかな白銀の光で照らされてそれが彼女の白い顔をさらに白く見せていた。

「いいのだけれど」

「いないのですか」

「ええ。それに」

「それに」

またセレネーに問う。

「何かあるのですか」

「一度ね。ゼウス様に言われたことがあるの」

「父にですか」

「そうなの」

実はセレネーはゼウスの直接の血縁者ではない。しかしそれでも

兄であるヘリオスと共に今も神でいるのだ。それは彼等の温厚な性格故にその仕事をするのを許されていたからである。

「私は。愛をすれば不幸になるって」

「不幸に」

「月は。悲しみの象徴でもあるからと」

少し俯いて悩ましげな顔になった。その顔はアルテミスから見ても心を引き込まれずにはいられないものであった。

「そう言われたわ」

「そうだったのですか」

「その不幸が何かはわからないけれど」

「愛することができないのですか」

「その前に相手を見つけることもできなくて」

そのことでも困り果てた顔を見せるのであった。

「まだ。愛を知らないの、私も」

「そうですか」

「けれど。不幸を気にしては駄目よね」

ここで顔を上げて言うセレネーであった。

「やっぱり。私だって」

「そうです。誰でもなのでしょう？」

アルテミスは明るい声で彼女を励ました。

「それでしたら」

「そうね。私も」

「誰が見つければいいのです」

アルテミスはわかっていなかったがここでは姉とも慕う女神を励ます為に言うのだった。これは彼女の精一杯の優しさであった。

第二章

「これから」

「わかったわ。私も誰かを」

「好きになりましたよ」

「ええ」

二人は笑顔でそんな話をした。そうして暫くして。セレネーはオリンポスの庭での神々の集まりの中で豊穡の女神であるデメテルからある話を聞くのであった。

「エリスにですか」

「そうよ。エリスにね」

セレネーよりもさらに穏やかで大人の美貌を持つデメテルはにこにこ笑いながらセレネーに語るのだった。その黒い髪と目が実に美しい。

「凄い美少年がいるのよ」

「そうなのですか」

「私も一度見たけれど凄く奇麗で。彼氏にしたい位よ」

「それはまた」

デメテルの冗談に思わず苦笑いを浮かべた。そうしてワインを飲むがここでデメテルがまた言うのだった。

「よかつたら貴女も彼を見てきたらどうかしら」

「私ですか」

「ええ」

そのにこやかな笑みでセレネーに述べるのだった。

「それに貴女はまだ」

「はい」

デメテルが何を言いたいのかわかっていた。それは。

「一人だったわね」

「そうです。それでは」

「何の気遣いもないわ。楽しんでね」

「そうですか。では私も」

「私も一人だし」

デメテルはまた笑う。実は彼女は夫がいないのだ。今は恋人もない。それでもゼウスや人間との間に子供が何人かいる。豊穡の女神は恋も知らなくてはならないのであろうか。

「気兼ねなく楽しませてもらったわ」

「そんなにその若者はいいいですか」

「やっぱり男は年下ね」

それはデメテルの趣味であつた。

「だから貴女も」

「その若者をですか」

「ええ。私はもうどんな感じが確かめたから貴女もそうすればいいわ」

「けれどデメテル、それは」

セレネーはふとデメテルのことを思った。彼女もその若者を好きなのではないかと思つたからだ。わざわざ会いに行つて恋を楽しんだのだからこれは当然であつた。

「貴女は」

「私はいいの」

だがデメテルはその優しい笑みでセレネーに言うだけであつた。

「私はね。もう新しい恋人がいるし」

「そうなのですか」

「貴女も。恋をするといいわ」

そう言つて彼女に譲るのであつた。

「それでいいわね」

「わかりました。それじゃあ」

彼女の言葉を受けてこくりと頷くのだった。

「行ってみます」

「エリスよ」

デメテルはまたその若者がいる場所をセレネーに教えた。

「そこで羊飼いをしているから。わかったわね」

「羊飼いなのですね」

「ええ」

セレネーの問いにこくりと頷く。

「そうよ。それじゃあ」

「はい、これが終わったら行って来ます」

こうしてセレネーはその若者のところに行くことになった。まだ昼だったが仕事の前に急いでエリスに行った。そうして草原に行くとそこに赤い癖のある髪に琥珀の瞳をした若者がいた。

「彼なのね」

セレネーはその若者の美しさを見てすぐにわかった。彼こそがデメテルの言っていた若者であると。見れば顔だけでなく身体も整い肌は白くまるで月の光のようであった。

「何て奇麗なのかしら」

セレネーはこの時空にいた。上から見下ろす彼は彼女が今まで見たどんな神や妖精、人間よりも奇麗で美しかった。彼女は一目見ただけで彼に心を奪われたのだった。

「もつと近くで」

自然にそう思った。それで密かに降り立ち何気なくを装って彼の前までやって来たのだった。

「あの」

「はい」

若者はセレネーが声をかけるとすぐに彼女に顔を向けてきた。見ればその顔は上から見ると美しく映えるものであった。

「貴方は。どなたですか」

「私ですか」

「はじめて御会いして失礼ですけれど」

そう謝ってからまた言う。

「気になりましたので。それで」

「私の名前ですね」

「そうです」

こくりと頷いて彼に応える。

「何と仰るのでしょうか」

「エンディミオンです」

彼はそう名乗った。その澄んだ高い声で。声もまた非常に美しい若者であった。

「僕はエンディミオンといいます」

「エンディミオンですね」

「ええ」

にこりと笑ってセレネーに言うのであった。

「それですね」

「はい」

今度はそのエンディミオンがセレネーに問うた。これは順番であった。

「今度は貴女のお名前を知りたいのですが」

「セレネーといいます」

彼女はそう名乗った。

「アテネから来ました」

「アテネからですか」

「ここに。移りまして」

アテネから来たと言ったのには理由があった。それは彼女の神殿がアテネにもあったからである。それでこう彼に言ったのであった。

第三章

「そうして貴方とここで御会いましたのです」

「そうだったのですか」

「いつもここにおられるのですか？」

セレネーはそうエンディミオンに尋ねた。

「羊飼いをされて」

「ええ、大抵ここにいます」

エンディミオンは正直にそう述べた。

「そうして可愛い羊達の世話をしています」

「そうなのですか」

「はい。貴女はいつも何処におられますか？」

「今まではどうにも居場所を見つけれませんでした」

少し暗い顔を作つて言うのだった。そのうえでまた言う。

「けれどこれからは」

「これからは」

「ここにいて宜しいでしょうか」

そう彼に言うのだった。

「貴方さえよければ。どうでしょうか」

「ええ、いいですよ」

エンディミオンはにこりと笑つてセレネーに言う。彼女はそれを聞いて顔を一気に晴れやかにさせるのだった。

「いいですね、それで」

「はい、貴女が何処にも居場所がないというのなら」

これはエンディミオンの優しさであつた。それはセレネーにも伝わった。

「どうかここに」

「わかりました。それでは」

「はい」

こうして二人はそれから昼はいつも草原で二人でいるようになった。それはセレネーにとつては至福の時間であった。昼は彼と会い夜は月と共に彼が眠っているのを見守る。そうして楽しい日々を過ごしたのであった。

そのことはアルテミスにもわかった。それで朝に彼女がエリスに向かおうとする時に彼女に声をかけるのだった。

「今日も楽しそうですね」

「ええ」

セレネーは上機嫌だった。その顔でアルテミスの問いに答えるのだった。

「今。とても幸せよ」

「そうですね。それはいいですね」

アルテミスもそのことを素直に喜ぶのだった。

「恋というのは。いいものなのですね」

「私も。今までは知らなかったけれど」

セレネーは一瞬だけ寂しい顔になった。しかしそれは一瞬であった。

「今は違うわ。毎日がとても楽しいのよ」

「恋は。それ程までに素晴らしいと」

「昼も夜も」

セレネーは言うのであった。

「とても楽しいわ。これが恋なのね」

「恋ですか」

「この世にこんなに楽しいものがあつたなんて」

うつとりとした声になっていた。その声から彼女が心から楽しんでいるのがわかる。だがアルテミスはそんな彼女を見てふとあの言葉を思い出すのだった。

「けれどお姉様」

「何かしら」

「私達は月の女神ですよ」

「ええ」

セレネーはアルテミスのその言葉に何を今更といった顔を見せた。
「それがどうかしたのかしら」

「確か私達は」

アルテミスはそのうえで言う、

「その恋が決して実らずに。そして」
また言う。

「悲劇に終わると。その運命だったのでは」

「若しそうだとしてもいいわ」

しかしセレネーはこう言うのだった。そのことはもう完全に頭の中に入っていないのがわかる。彼女はそれ程までに今の恋に溺れていたのだ。

第四章

「そんなことは」

「宜しいのですか」

「ええ、いいわ」

それをアルテミスにも告げる。

「だって。今こんなに幸せだから」

「今が幸せだから」

「そんなことはどうでもいいの、本当に」

不幸が目に入らないまま言葉を続ける。彼女は完全に今の幸せの中にその身体を浸し恍惚としていたのだった。

「この幸せはきつと永遠に続くわ」

「永遠にですか」

「悲劇だなんて信じられないから」

そのことを実際に言葉にも出した。

「このままね。ずっと彼といられるわ」

「それもですけど」

アルテミスはまた気付いたのだった。

「彼は人間なのですよね」

「ええ」

セレネーはその言葉に答える。

「そうだけれど。それが何か？」

「人間ですから」

アルテミスはそこに不吉なものを感じていた。しかしセレネーはやはりそれにも気付いてはいない。そこが二人の大きな違いとなっていたのだった。

「私達とは違います」

「！？何が言いたいのかしら」

アルテミスの回りくどい調子に首を傾げて問うた。

「よくわからないのだけれど」

「私達は死にませんが彼は死にます」

アルテミスはセレネーのその言葉を受けて率直に述べた。彼女が言いたいのはそこであつたのだ。

「ですからそれは永遠には」

「そうだったわね」

セレネーはそのことに気付いた。それに気付いて顔が暗くなるのを抑えられなかった。それは急にだが全てを一変させるものであつた。

「あの人は永遠にはいられないのね」

「はい、このままでは」

アルテミスはそのことをまた告げる。

「どうされますか、このままでは」

「どうにかするわ」

セレネーはすぐに思い詰めた顔になった。自分の気持ちを抑えられなくなってきたいるのもわかつていたがそれでもその気持ちを止められなくなっていた。

「絶対に」

「何かお考えが」

「ええ、あるわ」

その問いにも答える。

「何があつてもね。彼を失うわけにはいかないから」

それが彼女の気持ちだった。

「絶対に」

「永遠の命ですよ」

アルテミスは神にあり人にはないものを言うのだった。

「必要なのは」

「ええ、それは絶対に手に入るわ」

セレネーは思い詰めた顔でアルテミスに答えた。

「だから。私は諦めないわ」

「そうなのですか」

「永遠に彼と一緒にいたいから。だから
そうしてまた言う。」

「何とかするわ」

彼女には考えがあつた。そしてそれを実行に移すつもりだつた。
彼女はオリンポスに帰るとすぐに行動に移つた。ゼウスのところに向かいことの次第を申し上げたのであつた。

「そうか、人の少年をか」

「はい」

セレネーはゼウスの玉座の前に跪いていた。そのうえで話をしたのである。

「何とかありませんか」

「愛しているのだな」

ゼウスは玉座の上からセレネーに問うた。まずはそれからだつた。

「その少年を」

「その通りです」

セレネーは素直にそれを認めた。

「永遠に。一緒にいたいのですが」

「エンディミオンだつたか」

ゼウスはその少年の名を知っていた。それをセレネーにも言った。

「確か」

「御存知でしたか」

「うむ」

セレネーに対して答える。

「噂は聞いていた。だがその少年は神の血も一滴も受けてはいない」
「それも知っています」

神の血を受け継ぐ人間は多かつた。だが彼はそうではなかつたのだ。

「容易に不死になることはできないぞ」

「それはわかっています」

セレネーとて愚かではない。そのことはわかっていた。だがそれでも、あえてここに来たのである。その理由も既にはつきりとして
いる。

「しかしそれでも私は」

「どうしてもか」

「そうです」

必死な声でゼウスに頼み込む。顔も必死なものであった。

「何があっても。私は彼と共にいたいのです」

「永遠にか」

「はい、永遠に」

セレネーはまた言う。他には何もいらないとさえ思っていた。

「彼と。なりませんか」

「結論から言う」

ゼウスはセレネーの心を受けた。彼は気紛れであり好色であった
が決して邪悪な神ではない。だからこそ彼女のその真摯な気持ちを
無碍にはできなかった。だからこそそう言ったのである。

「それはできる」

「まことですか？」

その言葉を聞いたセレネーの顔が急に晴れやかになる。救われた、
心からそう思った。

第五章

「それは」

「嘘は言わぬ」

ゼウスもまた正直にそう述べたのだった。

「あの少年を決して死なないようにすることはできる。そして」

「そして？」

「老いないようにすることもな」

「できるのですね」

「しかしだ」

ゼウスはここで顔を急に曇らせた。そのうえでまたセレネーに言うのだった。

「よいのか？」

「！？」

セレネーはゼウスが急にその顔でこう言い出したので不思議に思った。そうして怪訝に思いまた彼に尋ねたのであった。尋ねずにはいられなかった。

「何がでしょうか」

「確かに永遠に老いず、死なずに済むことはできる」

彼はそれは保障した。

「しかし」

「しかし？」

「それだけではないのだ」

彼は顔を曇らせたまままたセレネーに告げた。

「彼は人間だ。我々とは違う」

「それはわかっていますが」

「いや、わかってはいない」

ゼウスは少し悲しげな顔になった。それには理由があった。

「このまま不老不死になればしないということだ」

「このままでは」

やはりセレネーにはこの言葉の意味がわからない。どうしてもわからないので首を傾げるしかなかった。だがそれでもわからないのであった。

「どうということなのか。申し訳ないですが」

「簡単に言えば目覚めることがなくなるのだ」

ゼウスはそう彼女に述べるのだった。

「目覚めることがない」

「そうでなければ。死を逃れることができないのだ」

「何故ですか？」

セレネーにはその理由がわからない。やはり彼女はわかっていなかったのだった。

「どうしてそのような」

「人だからだ。人は老いて死ぬのが運命」

ゼウスは告げる。それはあまりにも残酷で変えられはしない、そうしたものであつたのだ。

「それを変えるのは。私にもできはしない」

「ゼウス様です」

「誰にもできないのだ」

ゼウスはこうも彼女に告げた。

「どうしてもな」

「しかしそれでも」

セレネーは必死にすぎる。すがらずにはいらなかった。彼女はどうしてもエンディミオンと共にいたかったのだ。それも永遠に。その気持ちは変わらなかった。

「私は。彼と」

「わかつておる」

ゼウスもそれはわかっている。だからこそその返事も沈痛なものであった。

「わかつておるが。それでも」

「そしてそれを保つには眠っていないてはならないのですか」

「永遠にだ。他にはない」

ゼウスはまたセレネーに告げた。

「私には。それ以外はできないのだ」

「他の神にもですか」

「その通りだ」

ゼウスはさらに答える。しかしこの答えもまたセレネーにとってはあまりにも残酷なものであった。彼女にとっては受け入れられないものであった。

「わかったな」

「では彼と共にいるには」

セレネーは震える声でゼウスに問う。それでも彼女は問わずにはいられなかったのだ。

「それしかありませんか」

「残念だがそれしかない」

彼はまたしても告げた。

「それしかない。それでよければ」

「そうですか」

「私には勧められない」

ゼウスは言う。

「起きぬ者と永遠に側にいても。悲しいだけだ」

「はい」

セレネーは今にも泣きそうな顔で応えた。その通りだった。自分だけ起きていてそこにいても相手は目覚めはしない。それでは愛がないのも同じだからだ。

「それこそ。自分も眠らなくてはな」

「自分も」

今のゼウスの言葉にはつとした。今のその言葉が。彼女の心を捉えるのだった。

「自分もですね」

「そうだが」

ゼウスはセレネーの今の言葉に答えた。

「まさかそなた」

「はい」

セレネーは静かにゼウスの問いに頷いた。

「そのつもりです。私は」

「だがそれは」

ゼウスはセレネーを止めようとする。止めずにはいらなかった。

「そなたにとつても」

「ですが。それで永遠に彼と共にいられるのですよね」

セレネーはそのことに希望を見ていた。それで彼と共にいられるというのならそれでいい、心からそう考えるようになってきていたのだ。

「それでしたら」

「よいのか？」

ゼウスはまた問うた。彼女を気遣って。

「それで」

「夢の中で彼と共にいられるのですよね」

「ヒュプノスがそうしてくれる」

眠りの神である。冥界においてハーデスの側に仕える神の一人だ。彼は人々に眠りを与えそれと共に夢も与える。それが彼の仕事なのである。

第六章

「それに関してはな」

「それでは。それで宜しゅうございます」

セレネーは頭を垂れて述べた。

「私は。それで」

「満足なのだな」

「そうです」

彼女はまた答えた。

「願わくば。それで永遠に彼と」

「考えは変わらないのだな」

それでも彼女に問う。念を押して。

「どうしても」

「はい」

セレネーの考えは変わらなかった。彼女は夢の世界を選んだのだから。愛しい者と共にいられる、そちらの方を選んだのであった。

「それで」

「わかった」

ゼウスも遂に頷いたのだった。セレネーの心が変わらないとわかって。沈痛な顔であったがそれでも彼女の心を汲むことにしたのであった。

「それでは。そのようにしよう」

「有り難うございます」

「これも運命か」

ゼウスはまた沈痛な顔で述べた。その言葉には無念の色さえあった。

「月の女神の」

だがもう変わらなかった。セレネーはエンディミオンと共にいることになった。そうして彼女は遂にエンディミオンと共に永遠に眠

りの中に入ることになった。彼もまたそれを受け入れ二人はそのまま何処かへ消えることになったのであった。

その時だった。アルテミスが最後に自分の宮殿を離れるセレネーに声をかけた。彼女を止める為だ。

「お姉様」

「貴女が言いたいことはわかっているわ」

セレネーはアルテミスに顔を向けて述べた。わかっているても変えるつもりはなかった。

「それでも私は」

「これで。お別れなのですね」

「そうね」

セレネーは俯いてしまったアルテミスに述べた。しかしそれでも彼女の決意は変わらないのだった。

「もうこれで」

「考え直されることはないのですね」

「貴女には悪いけれど」

その言葉だけで充分だった。それだけでセレネーの気持ちが変わってしまった。アルテミスももうこれ以上言うことはできなかった。左様ですか」

「私は。神だけれど」

それは自分でもわかっていた。だがそれと共に。

「女なの。だから」

「女性であられたいと」

「ええ。恋の中にいたいよ」

それが偽らざる彼女の心の言葉であった。彼女は神でいるよりも女であることを選んだのだった。だからエンディミオンと共にいることを選んだのである。

「ここでも。貴女には我儘に見えるかも知れないけれど」

「それは」

「いいのよ。隠さなくても」

アルテミスを目を見て言う。今まで姉妹の様にいた二人だがこの時ばかりは何か違っていた。もうこれで会うことはない、その悲しみが二人をそうさせていたのだ。

「私は。自分のことだけしか考えていない馬鹿な女なのだから」

「私は。そんなことは」

「思っていないの？」

「はい」

アルテミスは正直に述べた。その緑の目でじつとセレネーを見詰めている。彼女は嘘を言うことはない。セレネーもそれはわかっている。わかっているからこそ辛いのであった。

「ただ。お姉様とこれでお別れだと思うと」

「月を御願いね」

続いてのセレネーの言葉だった。

「あの娘のことは。一人にさせて悪いけれど」

「あの娘のことはお任せ下さい」

ここでもセレネーを氣遣って言うのだった。何処までも彼女のことを氣にかけていた。

「私が責任を持って」

「有り難う。じゃあ任せるわ」

「はい」

「それで。後は」

セレネーはその言葉を受けてからもまた言う。最後に言うことがあったのだ。

「貴女に伝えておくことがあるわ」

「私にですか」

「ええ。月の女神はね」

静かに彼女に語りはじめた。

「月の女神である限り恋が実ることはないの」

「恋を」

「そう。恋を知ってもそれを楽しんでも最後にあるのは悲しみ」

じつとアルテミスの緑の目を見て語るのだった。その目に驚きの色があるのを見ながら。

「それだけなの。月の女神である限り逃れられない運命なのよ」

「そうなのですか」

「それを忘れないで」

そうアルテミスに告げた。

「一人になっても。いいわね」

「わかりました」

アルテミスはここでは嘘をついているわけではなかったが結果としてそうなった。何故ならこの言葉を本当にわかつてはいなかったからだ。彼女がこの言葉をわかるようになるのはこれからであった。恋により多くの悲しみを知るようになってから。それからであった。じゃあ。これで

「お別れですね、遂に」

「さようなら」

セレネーはアルテミスに対して別れの言葉を告げた。

「妹よ、さようなら」

「さようなら」

アルテミスもそれに応えて。今別れの言葉を告げた。

「さようなら、お姉様」

「永遠に」

「けれどもお互いは忘れずに」

「ええ。夢の中でも」

そう言い合って遂にセレネーはアルテミスの前から姿を消した。白銀の月の光がそのまま消え失せてしまうように。そうして後に残ったのは月の女神の悲しい運命だけであった。アルテミスはそのことをその都度辛い痛みと共に思い出すのであった。

2
0
0
7
.
1
1
.
5

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3698d/>

受け継がれる運命

2010年10月8日15時04分発行